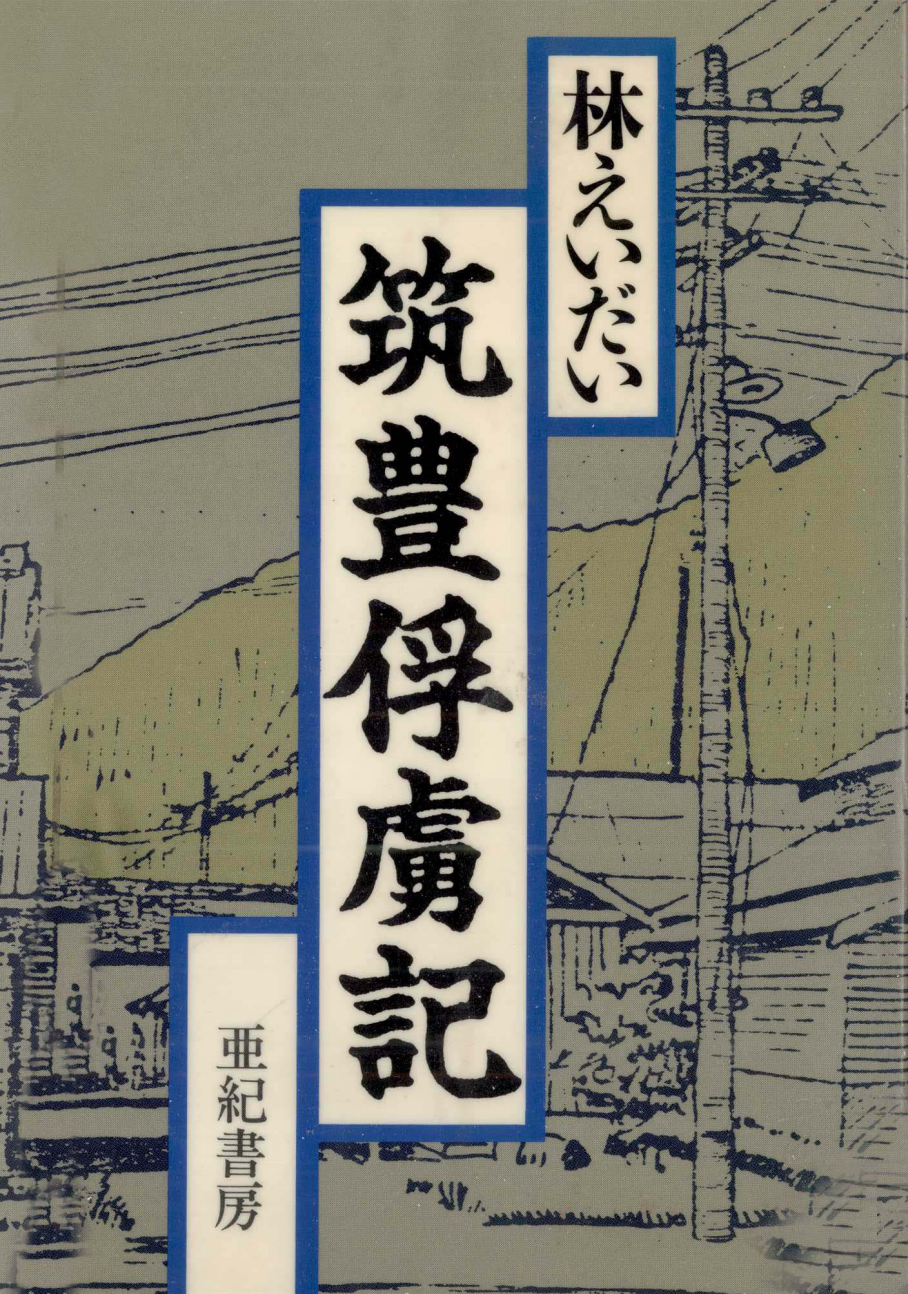




林えいだい

筑豊俘虜記

亜紀書房

林えいたい

筑豊俘虜記

亜紀書房

はやし

林 えいだい

1933年生まれ。早稲田大学中退。ノンフィクション作家
現住所 福岡県田川郡香春町採銅所2165 ☎0947-32-3276
主著

『八幡の公害』（朝日新聞社）

『望郷—鉅毒は消えず』（亜紀書房）

『嗚咽する海—PCB 人体実験』（亜紀書房）

『筑豊坑夫塚』（晩聲社）

『強制連行・強制労働—筑豊朝鮮人坑夫の記録』（現代史出版会）

『海峡の女たち—関門沖仲仕の社会史』（葦書房）

『女たちの風船爆弾』（亜紀書房）

『銃殺命令—BC 級戦犯の生と死』（朝日新聞社）

『筑豊米騒動記』（亜紀書房）

1987年7月25日 第1版第1刷発行

定価 1800円

筑豊俘虜記

著者 林 えいだい

発行所 亜紀書房

東京都千代田区神田神保町2—9

電話 03-264-8301 代

振替 東京 0-144037

乱丁本、落丁本はおとりかいたします。

K & S印刷・大洋社製本 ㊦20

1036-0514-0098

目次

筑豊俘虜記

序章 再会	3
-------	---

第一章 捕虜	13
--------	----

開戦	15	シンガポール陥落	20
インドネシア戦線	26	戦場にかける橋	35
底つく炭鉱労働力	43	捕虜収容所建設	47
潜水艦の標的	53		

第二章 異国	63
--------	----

折尾俘虜収容所	65	トレーニング	71	坑内労働	76
スピード、スピード	82	分隊長のブタさん	86		
坑内の最先端	91	ダイナマイト事件	98		
チョットコッチコイ	102	けが	110	腹が減った	118
病気	124	お前は炭鉱だ	130		

第三章 犠牲……………137

アービン脱走	139
銃殺	144
突撃命令	151
落盤事故	156
B 29 体当り	165
日本はギブ・アップだ	171
憲兵	177
非情なマラソン	181
敗戦前夜	187

第四章 解放……………193

センソウオワッタ	195
混乱	199
パラシュート	209
人民裁判	214
報復	220
逃避行	225
原爆の長崎	231
帰国	238
第二の戦場	243

終章 恩しゅうの彼方に……………251

捕虜番号四百八十番	251
捕虜番号八百三十二番	258
あとがき	271

筑豐俘虜記

序章 再会

戦後四十年を迎えた昭和六十年（一九八五）七月二十九日、初老のオランダ人夫妻が鹿児島本線折尾駅に降り立った。都市開発事業で新しいビルが建ち、昔とすっかり変わってしまった駅前で、四十年前の面影を追っていた。戦時捕虜として日本に移送され、最初に下車したうろ憶えの「オリオ」に間違いないか、派出所に行って二人は何度も念を押した。そして昔と変らない古ぼけた木造の折尾駅をもう一度見上げた。

捕虜時代の一時期を過ごしたことがある、福岡県遠賀郡水巻町の折尾俘虜収容所跡を四十年振りに訪ねて来たのは、オランダのエメロールド市に住むドルフ・ウインクラーさん（68歳）と妻のカリーさん（61歳）夫妻であった。

ウインクラーさんと私はこれまで面識はないが、その夜あるテレビ局から電話があつて、二人の来日を知った。局側の話によると、戦時中、日本鉱業遠賀鉱業所高松炭鉱の坑内で強制労働をさせられた時、お世話になった指導員の「タムラさん」という元坑夫を二人が探しているという。

私が筑豊の朝鮮人坑夫や外国人捕虜のことを記録しているので、田村さんを知らないかという依頼だった。さっそく関係者に当たってみたが、戦後四十年の間に炭鉱は閉山して、元坑夫たちは就職などで県外に出てしまっているの、非常に困難な人探しとなった。

やっとのことで田村稔さんの消息がわかったが、知らせてくれた方の話によると約三十年前に亡くなったということだった。ウインクラーさんがさぞがっかりするだろうと思い、そのことをどう伝えるか気が重くなった。

収容所の事務長で炭鉱側から派遣されていた長田信俊さんに同行をお願いして、私たちは折尾駅前の松屋旅館に二人を訪ねて行った。はるばるオランダから訪ねて来たウインクラーさん夫妻に、田村さんの死を伝えることは心苦しかったが、正直に話さないわけにはいかなかった。私から話を聞いた二人は、深く悲しんで言葉を失った。その打ちしおれた二人の姿を見て気の毒になり、もう一度田村さんの消息を確かめることにした。

その夜、田村さんの五男の妻子が北九州市八幡西区に住んでいることを突き止め、電話を入れてみると、意外なことに、田村稔さんが岡山県玉野市に健在であることがわかった。探し求めている田村さんが生きていることを知った二人は、一転して顔をほころばせて再会を待った。息子さんの死を田村さんと間違えて私に知らせてくれたのだった。高松炭鉱が閉山のころ、一家は県外就職で岡山県玉野市へ移住して、兄弟四人が三井造船所に勤めているという。父親の田村稔さん



40年ぶりに田村稔さん(左)と再会を果たしたウインクラーさん

(84歳)は、十年前に肝硬変を患い市内の池宗病院に入院していることもわかった。

新幹線の岡山駅まで出迎えてくれた四男の二郎さん(52歳)を見ると、ウインクラーさんは田村さんの若い頃とそっくりだといった。しかし、田村さん本人であるかどうか、二人を案内する私の不安は最後まで消えなかった。老齡だということもあり、かつての捕虜の一人が記憶にあるのかどうかもわからなかった。

長男の裕隆さん(59歳)の自宅で、二人はしばらく見詰め合っていた。田村さんの若いころの写真をじっと眺めているうちに鼻髭があったことを指摘した。本人の横顔がそっくりだともいった。田村さんには多い捕虜のことでのいちいち記憶にはないが、ウインクラーさんにとっては一生涯忘れない恩人なのだ。

時々田村さんが英語で話していたことを思い出した。田村さんが炭鉱で働く前、若松の英語塾へ行ったこともあり、それらの点が一致してきた。

「オランダでみんなが集まった時など、田村さんのことが話題になります。戦争中という特殊な関係の時、外国人の捕虜を敵国人として敵視していたが、田村さんだけは私たち捕虜を人間として扱ってくれた数少ない一人です。南方で日本軍は捕虜を平気で殴り殺したり、炭鉱では乱暴して傷つけたりしたが、一人だけ私をかばってくれた恩は忘れられない。いつまでも心に残っています。戦争中は悪い悲しいことばかりで、日本人全体を憎んでいました。しかし、今回会いに来たのは恨みを晴らすことなく、友情を暖めるために来たのです」

涙ぐんでいうと、二人はしっかりと手を握りしめた。採炭現場や道具のことなどを話すうち、田村さんの記憶がぼつぼつ戻ってきた。

「私には当時の記憶は十二分にはありませんが、確か七人の捕虜のうちの一人だったと思います。他人の仕事まで代ってやるような真面目な捕虜でした。決してこちらの人目を避けてサボるような人ではありません。」

私は捕虜の指導員として坑内に入りましたが、怪我をさせないように十分に気をつけるのが私の仕事でした。遠い国からはるばる見えられて、まるで夢のようで私は感謝しています。あの当時は大変な時代で、捕虜の方はきつとつらかったと思います。反省してお詫びしなければ……」

田村さんは、ウインクラーさんの軍隊時代の写真を手に頭を下げた。

二人は思い出を一つ一つたぐり寄せながら、昔のことを語り合った。ウインクラーさんは、「スコップ」、「ツルハシ」、「カキイタ」、「ガンヅメ」、「ハコ」、「キャップ・ランプ」など、片言の坑内用語を連発して、同席のみんなを驚かせた。

「ホジョウトレ、コラツ、チョットコツチコイ！」

ウインクラーさんがそういつておどけると、みんなの中にどつと笑いが起こった。ホジョウトレは「歩調取れ！」であり、コラツ、チョットコツチコイは、衛兵や指導員たちから殴られる前に呼びつけられる言葉だったからだ。

戦後四十年、心に残っていた「タムラさん」との再会を果たして、ウインクラーさんはやっと戦争の重みから解放されたようだ。

田村さんの家族は、高松炭鉱から持って来ていたスコップや鶴嘴つるはしなどを、土産だといって記念に贈った。

字野駅まで見送りに来た田村さんは、駅頭で別れを惜しんで手を振り続けた。戦争が終わりウインクラーさんが捕虜生活から解放された日は、その日と同じように暑く、昨日のことのように憶えていると感慨深くいうのだった。

ウインクラーさんが他の外国人捕虜と一緒にシンガポールから移送されて来たのは、昭和十九

年（一九四四）の夏だった。

太平洋戦争勃発と同時に、日本軍は東南アジア各地の占領地でおびただしい捕虜を抱えた。それを国内産業に投入して、労働力不足を補おうという政府の方針が打ち出された。敗戦までに移送された捕虜は、約三万二千人におよんだ。

九州の炭鉱ではそのうちの約六千五百人が、主に筑豊の炭鉱で召集された坑夫の穴埋めとして採炭作業などに従事した。生活環境も異なり、慣れない坑内労働、さらに飢えと病気という最悪の条件の中で、青い目の坑夫たちはひたすら解放の日を待ち続けた。捕虜という自分たちのおかれた立場を認識しながらもそれに耐えてきたが、彼らは明日は果たして生きていられるかと思う日々で、日付の感覚も失くすほどだった。

彼らにとって、収容所の生活は決している思い出ばかりではないはずだ。第一、坑内の採炭作業などが、ずば抜けて過酷な労働であったこと。第二に、敵国日本のために、何故石炭を掘って協力しなければならないかという矛盾があった。

だが、生き伸びるためには、危険な労働でも従事しなければならなかった。

戦うだけ戦って捕虜になったから仕方がないという彼らと、死ぬまで戦えと教えられた日本人との間で、捕虜観が全く違っていた。

言葉がわからないことから、炭鉱ではいろんなトラブルが生まれ悲劇のもとになった。

捕虜に対して親切にすると国賊だといわれた時代、田村さんとウインクラーさんのような日本人坑夫と捕虜とのヒューマンな関係は、当時としては例外としかいいようがないであろう。だが、危険な坑内で生命がけで一緒に働くということで、いつのまにか運命共同体としての連帯意識が生まれたのも事実である。

八・一五の日本の敗戦によって、支配者と被支配者の関係は逆転して、関係者は今度は連合国から戦争責任を問われることになる。折尾俘虜収容所では虐待した炭鉱の係員や指導員に対する、報復のための人民裁判が行われた。さらに収容所を脱走して銃殺されたオーストラリア兵をめぐ

って、関係者四人がBC級戦犯として、横浜裁判で死刑の宣告を受けた。

そのうち一人だけが再審によって減刑されたが、三人は巣鴨ブリズンの処刑台の露と消えた暗い歴史がある。

戦争はどんな国の人たちにも不幸を招くことは、歴史の教訓が生々しい。戦争責任を追及して日本人を裁いたアメリカの正義は、朝鮮戦争、ベトナム戦争によ



田村稔さんから記念にスコップとツルハシを贈られて喜ぶウインクラーさん夫妻

つてもろくも崩れてしまった。苦い戦争の教訓は生かされるどころか、自らの手によって汚して再びおろかな戦争を繰り返してきた。国と国との戦争には正義はないし、恐るべき破壊と犠牲があるのみである。

戦後四十年のこんにち、田村さんを訪ねて来たウインクラーさんにとって、戦争はまだ終わっていないのだ。田村さんと会い収容所跡を訪ねたことは、彼にとって戦争の総決算でもあった。だが、それによって彼の過去はぬぐいきれるものではないし、傷跡は永久に消えないであろう。

ウインクラーさんは高松炭鉱の坑内で強制労働をさせられ、そこで田村さんと出会うのである。捕虜三人が死亡した落盤事故で坑内に閉じ込められ、三日後に奇跡的に生還した。彼の呼び名は「八百三十二番」であった。

彼は、解放直後、被爆した長崎の惨状を目撃した数少ない外国人の一人であった。折尾俘虜収容所で落盤事故や病気で死亡した約百八十人の捕虜たちの遺骨は、戦友に抱かれて祖国へと無言の帰国をした。

オランダに帰国してまもなく、彼は再び独立戦争が始まったインドネシアへ派遣され、青春時代を戦争の渦中に生きてきた。

ウインクラーさんは、狂気のごとき戦争を二度も体験し、捕虜のみじめさをなめつくしてきた。

核時代のこんにち、彼は自分の戦争体験を語り継いでいこうと、ある危機感をもって戦争と捕虜時代の記録を書き始めた。

インテリアデザイナーであるウインクラーさんは、妻のカリーさんと一緒に、オランダで反核反戦の運動を続けている。

「戦争中、私が接した日本人は野蛮でバッドばかり。今、日本に来て接する日本人と比べてみて、同じ人間かと思うほどです。私たちは本当に戦争をしたのかと錯覚を起こしそうです。でも、それが戦争だったんです」と、ウインクラーさんはしみじみと語るのだった。

ウインクラー夫妻が帰国してからまもなくして、折尾俘虜収容所時代の仲間の一人、元オランダ兵のヘケットさんが書いた『炭鉱』という手記が私の手もとに送られて来た。文中で紹介しよう。